



七夕祭りを迎え、サンパウロ市のリベルダーデ地区のシンボル、大鳥居付近は華やかに飾りつけられた(2006年7月)
写真提供：ニッケイ新聞(以下も同じ)

鳥居大国、盆踊り、sobá、サンバ

ブラジル日系社会を理解するための4つのキーワード

ふかさわまさゆき
深沢正雪
ニッケイ新聞編集長



ふかさわまさゆき●静岡県生まれ。1992年にブラジルへ初渡航し、邦字紙「パウリスタ新聞」で研修記者。95年に帰国し、群馬県大泉町でブラジル人との工場労働の体験を描いた『パラレル・ワールド』(99年)で潮ノンフィクション賞受賞。同年、再び渡伯。2001年からニッケイ新聞に勤務し、04年より現職

1 鳥居大国

ブラジルを形容するのに「サッカー王国」とか「資源大国」という表現がよく使われるが、「鳥居大国」であることを知る人は少ない。ニッケイ新聞の調べでは、少なくとも20基はすでにある。おそらく日本以外でこれだけ鳥居のある国はほかにないだろう。

たとえば、伝統的な日系人集団地パラナ州アサイ市には町の入り口に立つ大鳥居以外に、市内の池田公園に3基、地元日系団体入り口にもあり、町内だけで計5基を数える。ちなみにブラジル全体でお社は5つほどしか聞かないから神道自体はそれほど盛んではないが、鳥居だけが勝手に「増殖」しているかっこうだ。日本移民100周年を記念して各地に日本庭園が建設されており、その大半には鳥居がつけられるので、年内にはさらに10基以上増えるだろう。設置形態で考えると、一番よくあるの

が日本公園の中のモニュメントで、次は何か日本に関係ある地域や施設、部署への入り口だ。変わったところでは、日本食レストラン、銀行内の Dekassegini (デカセギ。ポルトガル語のメディアでも一般的に使われている外来語) 対応窓口などだろう。地元開催としては世界最大級の日本をテーマにしたイベント「日本祭り」(ブラジル日本都道府県人会連合会主催。サンパウロ市内の大規模展示施設に47都道府県の各県人会が郷土料理と郷土芸能を持ち寄る。毎年十数万人が集まる) の入り口にも毎年、入場門代わりに大きな鳥居が設けられる。会場に入ったらい系団体だけでなく、ブラジル銀行やブラデスコ銀行などのブラジル企業ブースまでもが入り口部分に鳥居のデザインを使っており、鳥居だらけの不思議空間になる。

なぜこんなに鳥居があるのかというと、それが「日系人のシンボル」としてブラジル社会に広く認識されている



(右) サンジョゼ・ドス・カンボスで建設予定の記念公園内の鳥居 (完成想像図)。高さ16メートル、幅14メートルの鋼鉄製とブラジル最大となる予定
(左) パラナ州アサイ市の町への入り口に立つ大鳥居。高さ約10メートルのコンクリート製で、車4台が通れる大きさ。2004年建造。アサイは創設から日本移民とゆかりが深く、「旭(あさひ)」植民地として開けた

からだ。そのきっかけは、サンパウロ市中心部にある東洋街リベルダーデ区の大鳥居だといわれる。

リベルダーデは元々、地方の耕地で働き疲れた日本移民が、たまに「上京」して日本映画を見て、うどんをすすり、店の親父と近況をやり取りして、日本食材を買いだめするような場所だった。ひとときの日本情緒を味わって祖国への郷愁を癒し、「さあ、またしばらくがんばるぞ」と鋭気を養った。

1974年に大鳥居が、日系商店主の集まりであるリベルダーデ商工会によって建造された。同じころから始まった7月の七夕祭り、年末の東洋祭りや餅つきなどの行事が、ブラジルメディアによって「サンパウロ市の風物詩」として定期的に扱われるようになり、そのたびに鳥居は東洋街の名所として繰り返し紹介され続けた。その結果、今の印象が広く定着したようだ。

「日系人のシンボルになった『お社のない鳥居』」

歴史をひもとくと、最も神道の影響が強かった戦前には、ほとんど鳥居はなかった。きちんとしたお社も建てず、鳥居だけを建てるような行為は不謹慎であるという発想が強かったに違

いない。しかし、大半が錦衣帰郷を夢見ていた戦前移民にとって、敗戦で全ての計画がひっくり返った。帰る場所を失ったことからブラジル永住を決意し、子弟を大学にやっつて、社会上昇することに心血を注いだ。

と同時に、戦後に勝ち負け事件(ブラジルメディアの報道を受け入れて日本の敗戦を認めた「負け組」と、日本が勝ったと信じた「勝ち組」に日系社会が分かれ、数年間にわたり血みどろの争いをした事件)を起こしていた日本移民への悪いイメージが強かった当時、ブラジル社会から反発を呼ばずに日系のシンボルとして機能する何かが必要だった。お社のない鳥居は、宗教色を排除しつつも、神聖かつ高貴なイメージがあり、適度に目立つことから選ばれたのかもしれない。

鳥居が建造されたあとの1980年代、ブラジル社会では米国発の多文化主義や日本ブームが広まり、勝ち負けに起因する否定的なイメージもようやく薄れた。移民70年祭が行なわれた78年から、80年祭の88年ごろが、移民一世によるコミュニティの最盛期だったといわれる。その裏では、一世の高齢化が叫ばれる時代に突入した。一世から二世に移り変わる時代の潮目だった。

そんな時代に東洋街の象徴としての鳥居は広まった。

日本を直接に想起させる日の丸ではなく、日本に深い関係のある何かへの入り口としての鳥居は、日本人に連なる日系人的な存在かもしれない。ブラジル文化の特徴である文化的な懐の深さというフィルターを通して、「日系人」のシンボルとして選ばれたのが「お社のない鳥居」なのだろう。サンパウロ州レジストロ市にある鳥居の先には、丘の上のカトリック教会が見える。設計者の意図ではないが、そのような偶然性にも「ブラジル性」を読み取る人は多い。

2 盆踊り

毎年10月にはブラジル南部各州のドイツ系子孫の多い町々で「オクトーベルフェスト」という生ビール祭りが行なわれる。元々は本国ミュンヘンの有名な祭りを模してドイツ系社会内で1900年代初頭からこっそり行なわれていたものが、80年代から一般向けに大規模に行なわれ始めたもので、移民が持ち込んでブラジル社会に定着した文化イベントの典型と言える(一番有名なのは60万人もが訪れるサンタカタリー



グルッポ・サンセイ(サンセイ・グループ)が2000年ごろから始めたカラオケ・ミュージカル劇

写真提供:グルッポ・サンセイ

ナ州ブルメナウ市。リオ・グランデ・ド・スル州サンタクルス市も規模が大きい。そのほか、パラナ州などドイツ系子孫の多い場所のあちこちで行なわれる。

そのほか、復活祭(バスコア)の時期には、卵の形をしたチョコレートを手友人などにプレゼントする習慣がブラジルにはあるが、これもドイツ系移民が持ち込んだ習慣だと言われる。また、イタリヤ系移民が戦後に持ち込んだ、クリスマス時期にパネトーネというパンケーキをプレゼントし合う習慣もある。このように、いろいろな文化が移民によって持ち込まれて定着し、この国の新しい伝統として根づいている。もちろん日系人も負けてはいない。「ボンオドリ」だ。世界中探しても、5000人が一度に踊れる常設の盆踊り専用会場があるのは、サンパウロ州ペレイラ・バレットだけではないか。毎年7月に行なわれる大盆踊り大会にはノロエステ鉄道(サンパウロ州を東西に走る鉄道。かつて多くの日本人が工夫として敷設に携わった)沿線全域から集まる。日系の若者だけでなく、地元ブラジル人もたくさん参加し、和太鼓を置いたやぐらの周りを「炭坑節」や「東京音頭」に合わせて踊りながら

グルグル回る光景が見られる。これほど大規模でなくとも、似たような光景は伝統的な日系集落地ではあちこちで見られる。日本では一般的に、ブラジルと言えばサツカー、サンバ、アマゾンなどとステレオタイプで見られているが、実はそんなことも行なわれている。日本文化をめぐる100年
がかりの壮大な実験

パラナ州ロンドリーナ市にあるグルッポ・サンセイという若手日系集団は、名前の通り三世世代が中心になって自分たちの好きなように日本文化をアレンジして楽しんでいる。2000年ごろからはカラオケ・ミュージカル劇を始めた。1908年の第1回移民船笠戸丸の場面では洋装に身をかため大きな革カバンを持った家族が、当時の日本の世情をあらわす曲を歌うなど、2時間にわたって歌謡曲と寸劇で現代までを振り返る。年輩いた一世がそれを見て泣く姿を見たことがある。歌には、その時代の出来事を想起させる不思議な力があるようだ。

01年ごろから、やはりパラナ州北部のマリンガ市の日系団体青年部が中心になって「マツリダンス」を広めている。盆踊り会場を使って、自分たちが

カラオケで歌うような最近の歌謡曲にパラパラのような振りつけをしてみんなで踊るもので、「世界でたった一つの花」(SMAP)とか「島唄」(THE BOOM)、「ギザギザハートの子守歌」(チェッカーズ)あたりが定番だ。元々は和太鼓のつたやぐらを中心に同心円状にぐるぐる踊るスタイルだったが、最近ではステージをつくって向かい合った客席と一体になって踊る形に「進化」してきている。パラナ発で今ではサンパウロ州の若者にも広まり、日系文化と言えぬ広がりを見せつつある。

この現象について、日本伝統文化の担い手と言われる著名な若手文化人が来伯した機会に感想を尋ねると、「そういうことをやっているのとあとで後悔する」と言われ、自身がショックを受けたことがある。伝統的な日本人からすれば、どこか邪道な感じがするのだろう。だが、サブカルチャーという存在はいつの時代も正統派からは嫌われるものかもしれない。

日本文化自体がもつ高い可変性と受容性、それにブラジル文化の特徴である寛容性が合わさって新しい文化が生まれつつある。生活レベルの文化で、世界に発信できるような「普遍的な日



日系文化の「マツリダンス」の様子。昨年9月にパラナ州で行なわれたロンドリーナ祭りで撮影。日本の歌謡曲が流れるなか、ステージ上の振りつけに合わせて、会場全体が日系、非日系関係なく踊る、踊る、踊る

本文化」とは何かを考えたとき、ブラジルという西洋世界の一端で起きている現象はとても示唆に富んだものであると思う。どのような日本文化が子孫に広まりやすく、どうすれば子孫以外にも受け入れやすいのか。日本文化をめぐる100年がかりの壮大な実験が日系社会を舞台に行なわれている。

一世が持ち込んだ盆踊り、二世が大好きなカラオケ、さらにパラパラの融合で「マツリダンス」が生まれた。それぞれの部分は日本のものだが、組み合わせが「日系社会風」ということだろう。少なくとも、日本国内では生まれ得なかった形態だ。これを日本文化の変容と読み解くか、ブラジル文化のサブカルチャーの萌芽と見るか、いろいろな議論が展開されてもいいのではないか。

3 soba

昨年、サンパウロ市内の繁華街の一角に、カンポ・グランデ市の郷土料理店「ソバリア」が開店した。店内をいくらか見回しても、どこにも日本料理店であることは謳っていないが、メニューを見ると看板料理はあきらかに沖縄ソバだ。マット・グロッセ・ド・スル州都カンポ・グランデ市は、サンパウロ市から

北西に約1000キロ離れたところにある人口70万人の都市だ。沖縄県系人（沖縄独自の用語で、沖縄移民とその子孫の総称）が多く住み、露天市で働いている者が相当数いる。自分たちが食べるために提供していた沖縄ソバが、長い時間をかけて徐々に地元ブラジル人に広まり、06年には市の無形文化財に指定された。地元ニュースサイトMediamaxnewsの07年8月19日付「歴史家がカンポ・グランデの異種混交性文化を強調」という記事中で、アリゾレッチ・アントニア・ドス・サントス女史は無形文化財登録の件にふれ、「明らかに、このカンポ・グランデのsobaは日本のオリジナルの蕎麦とは異なる。つまり、これはもうカンポ・グランデ独自の文化と言っている」と誇らしげに語っている。

「ソバリア」の店主ジョアン・アゲジさん（32歳）に話を聞くと、「小さいときから沖縄系の友達と仲が良く、沖縄料理がクセになっていたんだ。だから、カンポ・グランデ文化の一部としての沖縄料理をサンパウロにぜひとも紹介したかった」と開店動機を説明する。準備の一環として、わざわざカンポ・グランデの沖縄系レストランで



←「ソバリア」のメニューには沖縄ソバの写真が。Pratos Principaisとは「メインの料理」の意味。沖縄ソバが3種類(肉の種類が異なる)も堂々とのっている。しかも、どれも肉がたっぷり

↓サンパウロ市内にあるカンポ・グランデ市の郷土料理店「ソバリア」店主のジョアン・アダジさん。「幼少から沖縄料理に親しんでいた」という



1年間休業し、その店から麺とスープをサンパウロまで取り寄せるといふ凝りようだ。

ブラジルの沖縄県系人約15万人の中心、サンパウロの沖縄県人会本部の役員から聞いたが、以前、母県(母国の県版とも言えるコロンニア語「ブラジルの日本語方言」で、県人会と出身県との関係を示すときに使われる)からきた賓客に婦人部自慢の沖縄ソバを出したら、「普通の沖縄ソバは豚の三枚肉がちよつとのおつているだけ。ここのはソーキン(豚のあばら)がのつてるからソーキンバダ」と言われた、とショックを受けた様子だった。肉食のブラジル文化に

適応するために、より食べごたえのあるソーキをのせたのが「ブラジル風」になったわけだが、本家からすると「異端」に感じられるのだろう。

カンポ・グランデではさらに「進化」して、牛肉がたっぷりのついている。しかも、エスペチーニョと呼ばれる焼き鳥風串焼きだ。これは通常、道端で焼いていて安価に食べられるブラジル大衆料理で、それが沖縄ソバと合体した形だ。

ブラジル料理の仲間入りを始めた「日系料理」

ブラジル人はじめ西洋文化圏では「ずする」音を出して食べる行為を忌み嫌う。だから、丼モノにもかかわらずフオークで食べ、スープはスプーンで若干すくう程度だ。最初にフェイラ(露天市)で沖縄ソバを提供し始めたのは1966年ごろだったという。まだ勝ち負け事件の悪い記憶がブラジル人一般に残っており、市場という人目の多い場所、日本人が集団になって、見たこともない棒(箸)で、見慣れない容器(丼)から麺をすすっている「様子は奇異にみられた。わざわざカーテンで仕切って、その中でこっそり食べていたが、従業員のブラジル人たちが興味を持ち始め、そこから徐々に長い時

間をかけて広まっていったのだという。ブラジル全体が日本食ブームの現在、サンパウロ市内だけで600軒もが日本食を提供しており、ブラジル料理のシユラスカリア(ブラジル風焼き肉。焼いた大きな塊を串に刺して持つてきて、ウェイターがその場で好きな分だけ切つて皿の上に置いてくれる)の数を超えた。

また、日本酒でつくるカクテル「サケピリーニャ」という存在も興味深い。「日本酒は生が一番」と有り難がつて升酒をすする日本移民に対し、10年ほど前からブラジル人中産階級の間でこれが流行ってきた。本来ブラジル特産のサトウキビの蒸留酒ピンガでつくるブラジル風カクテル「パチーダ」を、日本酒で代替する形で広まってきたものだ。マンゴーやパッションフルーツなどのトロピカルフルーツを入れて飲みやすくし、女性に好評だという。これなどは、従来型のように日本移民が発信源になって広めたのではなく、かつて一人歩きを始めている好例だ。

東洋街の一角にある大衆レストラン「佐藤」のメニューには、ブラジル料理に混じつて「kare raisu」「lanen」「misosiru」などローマ字書きされた料理がある。ブラジルの庶民に紹介



ニッケイ新聞。某経済紙と発音がそっくりだが、こちらは「日系」を意味してカタカナ。ブラジルで発行されている週5回の日刊日本語新聞

されているインド料理起源の「カレーライス」は、本来は英語のCurryまでがCurryにされて、日本料理となった。注文してみると、フェイジョアードというブラジルを代表する料理を通常入る小壺に入ったカレーと、ライスが別々に出てくる。しかも、カレーの上には、日本料理らしく、薬味の刻みネギがのっている。これなども、日本料理から分派してブラジル料理の仲間入りをした「日系料理」に踏み入っているのではと常々思う。

100年後には、ブラジルの郷土料理には、さらにいくつか元日本料理が加わっているに違いない。いつの日かそんなメニューが、日本のブラジル料理店に並ぶ日もあるだろう。文化の相互浸透とは、どこか痛み分けの「味」がする。

4 サンバ

今年2月のカーニバルでは、本場リオでもサンパウロでもスペシャル・グループのサンバチームが、日本移民100周年をテーマに豪華なパレードを繰り広げたことは、日本にもニュースで流れたから知っている人も多いことだろう。

でも、「ジャポネース」(通常は日本移民と日系人の総称。日本について言う場合は日本人)と「サンバ」——これほど相容れないものはない、というイメージが元来ブラジルにはあった。例えば、打楽器を叩くサンビスタ(サンバ奏者)の間では、「日本人がサンバに入った」(Japones entrou no samba) という言い古されたフレーズがある。本当に日本人が演奏に参加したのではなく、誰かがリズムを乱したときに使われる。

逆に「真面目」「勤勉」が自己認識である日本移民側にとっては、サンバは「裸踊り」的な印象が強く、一世はほとんど参加してこなかった。移民にとって、ブラジル料理やポルトガル語は必要にかられて生活の一部に取り入れてきたが、サンバは最もエキゾチックなブラジル文化として距離が置かれてきた。

初めてエスコラー・デ・サンバ(サンバをコミュニティ活動の中心とする集団。「サンバ学校」とか「サンバチーム」と訳す)に本格的に参加した日本移民は、ジョアン・ジャポネースこと山本マサヨシさん(故人)だ。娘のトゥーリアさん(47歳、二世)に言わせると「本当にポヘミアンな人(自由奔放な暮らしをする人)で、サンバをやりに行く朝まで帰ってこない人だった」。どれほどポヘミアンかと言えば、実の娘ですら父親の写真1枚手元になく、生年月日、出身地、渡伯年月日はおろか、死亡年月日すらわからないほどだ。娘の記憶によれば、山本さんがサンバを始めたのは戦争中までさかのぼるはずだ、という。

今こそサンパウロ市リベルダーデ区と言えば、「日本のカケラ(um pedaço do Japão)」「東洋街」と言ったほうが通りがよいが、かつては黒人と縁の深い場所だった。七夕祭りが行なわれるリベルダーデ広場は、かつて「ラルゴ・ダ・フォルカ(首つり広場)」と呼ばれた黒人奴隷たちの絞首刑場だった。「あの世で永久に自由(リベルダーデ)になれ」との逆説的な意味合いが込められている。

その広場から坂を下ったバイシヤー



サンパウロ近郊のモジ・ダス・クルーゼス市のカーニバルで、日伯国旗をあしらった旗を持って踊る子どもたち

ダ・グリセイリヨ地区は戦前からの古い黒人コミュニティがあり、サンパウロ最古、1937年に創立したエスコラー・デ・サンバ「ラバベス」が今もある。山本さんは戦争中からそこに出入りしていたという。トゥーリアさんいわく、「当時の黒人コミュニティは排他的で、地元の白人ですらなかなか仲間に入れない時代だった。まして日本生まれの父は最初大変だったと思いません」。文献によれば、60年代までエスコラーの大半は黒人やムラート（黒人との混血）によって占められていた。

レージ・ナシヨナル・デ・サンバというラジオ番組を27年間も続け、サンバ界の生き字引的な存在のエヴァリス・ト・デ・カルヴァーリヨさん（77歳も「ジヨアン・ジャポネースが日本人で最初のサンビスタだ。あの当時、ほかにエスコラーに入ってくる日本人はいなかった」と太鼓判を捺す。クイッカヤタンボリンが上手かったという。

トゥーリアさんの母は北東部のピアウイ州出身で黒人系の血が入っており、当時、日本移民が黒人系と結婚することとは珍しかったし、今でも多くはない。でも、娘いわく「父があまりにボヘミアンだったので、母が愛想を尽かして

離婚してしまいました」と言う。娘が14歳のとき、父は海岸部のグアルジャ市に引越し、別の黒人系女性と同棲を始めて以来疎遠になり、99年ごろに亡くなったと噂に聞いたという。

今でこそ、リオのカーニバルでも日本移民の歴史がテーマに選ばれ、浅草サンバカーニバルにも何十万人の見物客が押し寄せるようになったが、日本人初のサンビスタの人生は、型破りすぎていまだに注目されることはほとんどない。

100年をかけて日本移民は「ブラジルの民俗」になった

日本移民が初めてカーニバルのテーマに選ばれたのは1983年のことだ。サンパウロのエスコラー、バロック・ゾーナ・スルがテーマとした。最も立派なパレードをするスペシャル・グループに次ぐプリメイロ・グループにおいて、「移民75周年または日出ずる国」をテーマ曲にパレードし、6位に食い込んだ。次は98年の移民90周年に、バイバイというスペシャル・グループのエスコラーが日伯文化統合を掲げた「万歳！バイバイ」という曲で見事優勝をかつさらった。同エスコラーは以来、4年連続優勝する快挙を成し遂げた。それぐらいパレードの東洋的デザイン

のインパクトは強かった。

今年サンパウロのウニードス・ダ・ピラ・マリアが見事なパレードを繰り広げ、リオでもポルト・ダ・ペドラが健闘した。二都で日本移民がテーマになることなど、前代未聞だ。ブラジルの「国民音楽」であるサンバに100周年がテーマとして選ばれたことは、日本移民の歴史が保守的な一般大衆から「ブラジルの民俗」として認められたことでもある。

また、アマゾン河中域のマナウス、マツトグロソソ州、サンタカタリーナ州でも一部のエスコラーが100周年をテーマにした。出色なのは、サンパウロ市近郊のモジ・ダス・クルーゼス市で、カーニバル全体の共通テーマに100周年が選ばれ、10エスコラー全てが日本移民について歌い、パレードを練り広げたことだ。リオが影響の広さを示すとすれば、こちらは日本移民の浸透度の深さを示すものだろう。

リオやサンパウロのパレードは、グロブTV局の衛星中継によって、世界の数百万人の目に触れることになった。世界から見ても、日本移民は「ブラジルの民俗」となった。100周年にふさわしい象徴的な出来事だろう。☺